

## 内分泌代謝内科

肥満・糖尿病・高血圧症・脂質代謝異常などの代謝性疾患は遺伝的背景とホルモン異常に生活習慣が絡んで発症し、動脈硬化症（心筋梗塞や脳梗塞）、腎不全を引き起こし、人の生命を脅かしており、また、下垂体、甲状腺、副腎などの古典的内分泌臓器に加え、今や、脳、心臓、血管、肝臓、腎臓、脂肪組織、骨格筋など、全身のあらゆる臓器が生理活性物質を産生し、さまざまな病態に関与している。したがって、内分泌代謝学のトレーニングを受けることは、内科、ひいては医学のすべての領域に精通することとなり、人間を全体として理解することにつながる。これは将来どの領域に進むにしても臨床医として必要不可欠な資質である。

### I. 一般目標

内分泌代謝内科医として、患者の臨床情報を総合的に判断し、裏に潜む病態を見抜く眼を持つために、内分泌代謝疾患の診療に従事し、基本的な考え方や技能を修得できる。

### II. 担当する診療科

内分泌内科、糖尿病・代謝内科

### III. 研修期間

1カ月以上

### IV. 指導スタッフ



原発性アルドステロン症診療ガイド

	氏名	職名・担当	医師登録年月	指導医講習
責任者・指導医	臼倉 幹哉	内科部長 (内分泌代謝内科)	1998.5	◎
	若山 綾子	内科医長 (内分泌代謝内科)	2002.5	◎
	東谷 拓弥	内科医員 (内分泌代謝内科)	2013.3	

### V. 基本的な指導方法

1. 問診&診察所見、レントゲンや心電図、一般臨床検査値などの臨床情報を総合的に判断し、病態を把握する能力（同時に見逃しやすい内分泌疾患の発見の仕方、コツ）を習得する。
2. 各種内分泌負荷試験の手技と解釈する能力を習得する。
3. 甲状腺エコーと穿刺細胞診の技術を習得する。
4. インスリン療法・自己血糖測定の手技を習得する。
5. 糖尿病教室やチーム医療に参加による、患者教育の方法や医師としてのチーム医療の指導の実際の技術を習得する。
6. 指導責任者とともに当直業務を行う。

VI. 行動目標 (→ p12)

VII. 経験目標 (→ p13~21)

A. 経験すべき診察法・検査・手技 (→ p25~27、必修科目内科の項参照)

B. 経験すべき症状・病態・疾患

- ・頻度の高い以下の症状を経験し、鑑別できる (→ p27、必修科目内科の項参照)。
- ・緊急を要する症状・病態を経験し、初期治療に参加できる (→ p27、必修科目内科の項参照)。
- ・経験が求められる疾患・病態

視床下部・下垂体疾患 (下垂体機能障害)、

甲状腺疾患 (甲状腺機能亢進症・甲状腺機能低下症)、副腎疾患 (副腎不全、副腎機能異常)、

糖代謝異常 (糖尿病とその合併症・低血糖)、高脂血症、蛋白拡散代謝異常 (高尿酸血症))

C. 特定の医療現場の経験 (→ p27、必修科目内科の項参照)



糖尿病教室



栄養食事指導